

2022年度「チャイルドラインなら」活動のまとめ

チャイルドラインは、「子どもの権利条約」の理念に基づき、18歳までの子どもの「悩み」や「声」を、毎日午後4時から午後9時まで全国の68団体が聴いているボランティア活動です。「チャイルドラインなら」はそのうち、毎週木曜日午後5時から午後7時30までと毎週日曜日午後4時から午後6時30分までを担当しています。また、「チャイルドラインなら」では電話を聴く「受け手」に子どもたちの目線に近い大学生を中心に担ってもらっています。

1、電話を受ける私たちの姿勢

子どもたちは自分で考え自分で決定し自分で行動できる存在と考えています。私たちは子どもたちに指示や説教は行わず、「子どもが思いを吐き出す」→「評価せず聴く」→「理解する」→「共に考える」→「子どもの自己決定を待つ」というスタンスで取り組んでいます。

2、受信件数と電話内容

(1) 「チャイルドラインなら」が2022年度1年間に受けた総受信件数は2,935件で、そのうち会話が成立したのは623件でした。ただ、会話不成立が232件、無言が2,065件あり、会話が出来なかった割合が総受信件数の78.2%を占めているのは全国の傾向(68.9%)と同様で、話を聴いてもらいたくて電話をかけたものの話し出すのを戸惑っている子どももいると見えています。

(2) 成立した会話内容

心の状態や恋愛、進路など「自分に関すること」が238件で38.0%と最も多く、次に性行動や性器、自慰など「性に関すること」が139件で22.2%、学校での人間関係やいじめ、不登校など「学校に関すること」が137件で21.8%、家庭での人間関係や虐待、暴力など「家庭に関すること」が88件で14.0%などと続いています。数は少ないですがリストカットなどの自傷行為や性的マイノリティなど深刻な電話もあります。

3、具体的な子どもたちの声

以下は、プライバシーに配慮したうえで内容を編集した子どもたちの声の事例です。

(1) 自分に関すること

- ・大学受験が迫っていますが、成績が伸びず不安で仕方ありません。(高校女子)

- ・自分がいつか死ぬと思ったら怖くて仕方ありません。お母さんは「気にしないで」としか言いません。(小学男子)
- ・「寒い、死にたい」、手首にリストカットの跡がある。母は「お前なんか生むんじゃなかった。」と僕を罵倒する。110番したけど解決しない。(10代男子)
- ・潔癖すぎる自分がいや。不潔な人が近づくと気が気でない。嫌いな先生が触ったプリントには触れたくない。(高校女子)

(2) 性に関すること

- ・戸籍上は女性です。でもスカートがはけず高校に行けません。(10代)
- ・女性の裸が目につかび、他のことが手につかない。(中学男子)

(3) 学校に関すること

- ・不登校です。精神科で統合失調症と診断されました。人が僕の悪口を言っているのが聞こえます。(中学男子)
- ・(泣きながら) 障害児学級へ行きたくない。担任の先生はなぜ障害児学級に行かないといけないか説明してくれたけど、友達と離れたくない。(小学女子)

(4) 家庭に関すること

- ・酒を飲んで私たち兄弟に物を投げつける父をどうすればいいですか。(中学男子)
- ・母子家庭です。昼間は保健室にいましたが、今も吐き続けています。夜一人で家にいるのはいやです。(小学女子)
- ・再婚した母のSEX場面に出くわした。夜になるとその声が聞こえる。母に言ったけど変化がない。新しい父は嫌いじゃないけど何とかならないだろうか。(中学女子)
- ・母の暴力が続いている。母に自分の意見を言うと「反抗するな」と言う。担任の先生に相談したいが母の仕返しが怖い。(高校女子)
- ・父の暴力により施設にいる。話し相手がいない。すぐに人の顔色を見てしまう。人への甘え方がわからない。(小学女子)

4、子どもたちの声から見えること

私たちに電話をかけてくる子どもは周囲に話を聴いてくれる大人がいないからでしょう。子どもは理解されているという安心感があれば、自分の考えを持ち自分から行動を始めます。私たちが「聴く」に重点を置くのはそのためです。

また、子どもの個性は全員異なり成長の速度も異なります。「こうあるべきだ」という大人の思いだけでなく、「一度、子どもの意見を聞いてみよう」という大人の態度が、子どもとのより良い関係を生み出します。答えが出なくとも一緒に考えてみるという大人の元に育った子どもたちは将来、同様の行動をとるに違いありません。

5、電話の「受け手」について

県内の各大学を通じて、このボランティア活動に参加したい学生を募集したところ、5大学から15名の応募があり、その学生たちには電話を受ける「受け手」になるための養成講座を2月から3月にかけて5日間開講しました。また、「受け手」をサポートする「支え手」として教員や教員OBのほか電話相談員経験者7名が活動しました。

特に大学生は、より子どもに近い目線で話を聴くことができ、「チャイルドラインなら」の心強いメンバーで、大学卒業後も職業として、またボランティアとして子どもの側に居続けてくれることを願っています。

6、2022年度決算

奈良市や奈良県からの補助のほか、個人や団体の方々よりご寄付をいただきましたが、2022年度は約25万円の赤字となりました。今後とも皆さま方の暖かいご支援とご理解をお願いします。

7、今後の課題

- (1) 奈良県の子どものチャイルドラインへの発信件数の少なさは、チャイルドラインに対する認知度の低さを物語っています。ミニカードの配布やポスターの掲示、新聞各社への記事依頼のほか、SNSを利用した広報活動も継続します。
- (2) 無言電話の多さは、子どもたちにとって日頃使わない電話に対するハードルは高く、チャットなど文字によるコミュニケーションの必要性を示唆しています。ボランティア人数を増やし、チャット相談の実施を目指します。
- (3) 厳しい収支状況を改善するため、会員を増やすとともに、民間団体などからの助成金の獲得に努めます。